

2020年4月19日 復活節第二主日・要約

(ヨハネ 20:19～31)

司教 ミカエル松浦悟郎

教会は、復活節第二主日を神のいつくしみの主日と決めました。イエスの死と復活は、神さまの私たちに対するいつくしみと憐みそのものだからです。

復活祭後、教会は復活祭の喜びを8日間にわたって典礼の中で祝いました。この間の毎日のミサでは、復活したイエスが弟子たちと会われた場面が朗読されました。弟子たちが復活したイエスと出会う体験は、ある一定期間(40日)、限られた弟子たちだけでした。出会った弟子たちはもちろん、イエスが復活したことを信じましたが、それ以外の弟子たちは、そのイエスと出会った弟子たちの言葉を聞いて信じたのです。そうやって広がり、やがて共同体の信仰になっていきました。イエスが見える姿で現れた40日というのは、個人の信仰から共同体(教会)の信仰になるための期間だったのです。だから、その信仰を受け継いだ私たちはイエスを直接見なくても信じているのです。

今日の福音は、イエスがトマスに現れる場面。トマスは、他の弟子たちがイエスと会ったと言っても信じませんでした。イエスは彼に傷跡を見せて、そこに触れなさい、そして信じなさいと諭します。トマスは「私の主、私の神よ」と言って信仰を表明します。このことから、私は子どものころ、「見なければ信じないトマス」というように悪い見本のように感じていました。でも、そうではないと思います。イエスはトマスに、「傷跡に触れなさい」と言いましたが、実際はどうだったのかと考えてみました。トマスは、イエスを見たので「傷跡に触れなくても信じます」と答えたのではないかと思います。それでもイエスは、トマスにあえて触れさせたのではないかと思います。それは、イエスはトマスに「傷跡の証人」として派遣するためです。

以前、私の教会にいた一人の女子青年が、マザーテレサの「死を待つ人の家」にボランティアに行きました。彼女は帰国すると私のところに来てこう言うのです。「私ははじめてイエスの十字架の意味が分かった気がする」と。彼女が働いたその家の入口にイエスが十字架上で言った「渴く」という言葉が掲げられていたそうです。インドの中で、貧しさゆえに外で捨てられ死んでいく人々の現実、その背後には世界で苦しむ人々が傷つき叫んでおり、その苦しみ渴きをイエスがご自分のものとされて「渴く」と言われた。そう感じたのでしょうか。

トマスが触れたイエスの傷跡は、人間の背きのため、それゆえに苦しむ人々の渴きそのものなのです。トマスは、その証人となったと思います。私たちも、トマスのような証人になるように派遣されているとしたら、それは自分の固有な体験の中から生まれてきます。自分の体験が良いものであってもつらい悲しい体験であっても、その中でしかないイエスの心に触れているのです。それが何であるかを深めながら、私たちも、復活のイエスの証人として歩んでいきましょう。